

『一谷嫩軍記』

解説

本作は宝暦元年(一七五一)十二月、大坂豊竹座で全五段の人形浄瑠璃として初演され、翌年すぐに歌舞伎に移入された。立作者は並木宗輔であるが上演前に没したため、浅田一鳥、浪岡鯨児、並木正三らが補筆したとされる。内容は『平家物語』に描かれた「一谷の合戦」を巡る「熊谷直実出家譚」と、平忠度の『千載和歌集』への撰歌逸話の二つを中心とし、近代以降の歌舞伎では三段目「熊谷陣屋」を中心とする前者の上演が主となった。

この作品の価値は、軍記物に描かれた熊谷が若き敵将敦盛の首を討つ哀話を、実は主命により我が子小次郎を討つ身替劇にした点にあり、より戦乱の世に生きる武将の無常観が浮き彫りになっている。「熊谷陣屋」の熊谷役は歴代の座頭格役者が勤める重い役。江戸期の三代目中村歌右衛門の型を基とする四代目中村芝翫創始による様式美の強い「芝翫型」と、七代目市川団十郎から伝わる型に深い心理描写を加えた九代目団十郎による「団十郎型」があり、後者による上演が多いが、今回はその名跡を継ぐ当代による「芝翫型」による上演である。

今上演で「陣屋」の前につく、原作三段目中にあたる「御影浜浜辺(宝引き)」は上演が珍しく、昭和四十六年国立劇場以来の上演となる。石屋の弥陀六(実は弥平兵衛宗清)や藤の方が陣屋に至る理由などが明らかになるが、いわゆるチャリ場にあたり、おかしみを主とする演出で戦乱の世に直面する痛苦を和らげる。

あらすじ

・序幕 御影浜浜辺の場

源平が争う平安末、寿永三年(1184)春のこと。都を追われた平家は政権を奪い返そうと、摂津国須磨で源義経率いる源氏と激突するが、敗走し、多くの武将を失った。

ここはその戦場からほど近い御影浜。村人たちは松並木の中に立てられた立派な石塔を眺めて噂話をしている。この石塔を作った石屋、白毫の弥陀六が、建立を依頼した若衆を案内して来たのだが、いつの間にかその若衆の姿が見えない。村人が幽霊の仕業だと騒ぎ出すと、弥陀六は施主の若衆から貰った笛を袱紗包みから出して証拠を示す。

この場に平経盛の妻・藤の方が源氏方の追っ手を逃れてきた。藤の方は弥陀六が持っている一管の笛に目を止める。この笛こそ、出陣した我が子平敦盛が肌身離さず所持する〈青葉の笛〉であった。我が子の安否を案じる藤の方に、先の戦の一部始終を目撃していた村人たちは、敦盛が源氏の武将熊谷次郎直実の手によって討たれたことを伝える。愛する我が子の死

を知って、悲嘆の涙を流す母。聞けばその場で恋人の玉織姫も哀れに殺されたという。石塔建立の施主は死した敦盛なのであろうか。

その石塔の詮議と藤の方の捕縛のため、源氏の重臣梶原平三の臣で土地の代官でもある番場の忠太が家来を引き連れて現れた。これに対し平家譜代の土地に住む村人たちは、源氏に一矢報いようと、弥陀六が藤の方を逃がすのを手伝い、鋤鍬を手に抗った。そして忠太を散々に引き廻すと、忠太は急所を打たれて呆気なく死んでしまった。慌てた村人たちが逃げようとするところに、庄屋の孫右衛門が駆けつけた。とんでもない罪を犯してしまった村人たちの誰かを罪人として陣屋に届けなければならない。孫右衛門は仕方なく縄で籤を作って村人に引かせるが、なんと自分で当たりを引いてしまった。孫右衛門が困り果てていると、戻ってきた弥陀六が何か考えがある様子で、罪の申し開きをしようとその身代わりになると申し出るのであった。

・二幕目 生田森熊谷陣屋の場

ここは源氏方の武将、熊谷直実が平家討伐に臨む陣屋。その傍らには若木の桜とともに、主君義経から託された制札が立っている。この制札には武蔵坊弁慶の筆による「一枝を伐らば一指を剪るべし」との謎めいた言葉が記されている。

この陣屋を熊谷の妻相模が訪れた。夫の機嫌を損ねるのを承知で、初陣の我が子小次郎を案じてここまで来てしまったのである。熊谷の留守を守る家来の堤軍次から小次郎の息災を聞いて安堵する相模。ここに御影浜から逃げてきた藤の方がたどり着いた。その顔を見て驚く相模。相模にとって藤の方は、かつて御所勤めの折に夫との不義を庇ってくれた恩人であった。あの折り、藤の方は後白河院の胤を懐胎。二人は同じ年映えの男子を持つ母であったが、藤の方は愛息敦盛を戦で失ったという。相模は言葉もなく、夫婦してその身を守護することを約束する。しかし相模の夫がいまは熊谷直実と名乗っていると知り、藤の方は憤る。この熊谷こそ、我が子を討った憎い敵であった。藤の方は恩を仇で返したと、相模に「敵を討たせよ」と迫った。

ここに鎌倉方の梶原平次が石屋の弥陀六に縄を打って引っ立ててきた。熊谷を二股武士と疑う梶原は、敦盛供養の石塔の施主が熊谷だと弥陀六に白状させようとする。しかし弥陀六は「誂え人は敦盛の幽霊」と繰り返すばかり。梶原は熊谷の帰りを待って詮議をしようと、弥陀六を奥へ引っ立てていく。

熊谷が足取り重く帰陣してきた。これを出迎える堤軍次。熊谷は妻の相模が陣内に居るのに気がついて驚き、我が子可愛さの短慮な振る舞いをきつく咎めた。しかし、もし我が子が討死しても「名誉なこと」という妻の毅然とした言葉に顔色を直し、小次郎初陣の手柄と、自らが敦盛卿の首を討ち取った功名を語りはじめた。それを陰で聞いていた藤の方が堪らず

「我が子の敵」と熊谷に懐剣を抜いて襲いかかってきた。これを抑えた熊谷だが、相手が恩ある藤の方とわかり、驚き飛び退いて平伏する。熊谷は乞われてその日の戦のあらましを物語り始める。

去る三月六日の夜。熊谷は敵将の敦盛と争いこれを組み敷いた。「早く首討て」という健気な敵将の態度に、同じ年恰好の息子を持つ熊谷は一瞬躊躇するが、味方の平山武者所の二心を疑う声に急き立てられ、是非なく敦盛を討ち取ってしまった。熊谷が「戦場の習いだ」と宣うと、藤の方は愛息の無惨な最期を思って泣き崩れた。そして母思いの子の追慕に、形見の青葉の笛を吹く。すると不思議にも隣座敷の障子に敦盛の影が映った。

熊谷が長袴に衣を改め、首桶をもって現れた。既に御大将義経は陣屋の内であった。熊谷は託されていた制札を引き抜いて首桶に添え、主君に差し出した。その首を見て相模が驚きの声をあげた、面差しは間違いなく我が子小次郎のものであった。熊谷は立ち騒ぐ相模と藤の方を懸命に制し、あらためて主君に実検を乞うた。しばし首を凝視する義経……「敦盛が首に相違ない」と宣うと、自分の心中を良く察した熊谷の行いを褒めた。実は院の胤である敦盛を死なせてはならないと、義経は若木の桜の守護に装えて熊谷小次郎の身替わりを示唆したのであった。この謎かけを理解した熊谷は、須磨浦で二人を密かにすり替え、自らの意思で我が子を討ったのだ。相模は変わり果てた我が子の姿に慟哭する。門出の時の微笑みが忘れられない。しかしこの場では抱く首を我が子とも名乗れず、侍の家に生まれた子の悲劇をひたすら嘆いた。

この様子を梶原平次が密かに伺っていた。梶原は義経・熊谷主従が謀をもって敵の敦盛を助けたと、鎌倉へ注進に走ろうとした。すると弥陀六が背後から手裏剣を打ち、梶原を絶命させた。石屋にあるまじきその俊敏さ。義経はその眉間にあるほくろを見て、弥陀六の正体がかつての平家の武将弥平兵衛宗清だと看破した。母常盤に抱かれた幼少の砌、平家方によって殺されそうになった自分たち兄弟を情けによって救ってくれたのがこの宗清であった。義経は恩人との邂逅を喜ぶが、宗清はあの折りに源氏の御曹司を助けていなければ今の平家の没落はなかったと悔恨する。その宗清に、義経は障子内であった鎧櫃を託す。その中には真の敦盛が隠されていた。我が子との対面を急ぐ藤の方を、宗清は慌てて制した。

出陣の時が来た。熊谷は髻を切って出家の意図を示し、義経に暇乞いを申し出た。既にその鎧下は僧形であった。今よりは名を蓮生と名を改め、伴小次郎の回向をするため旅立つという。これまで愛を注いできた我が子を自らの手で討たなければならなかった武将の悲しみ。熊谷は世の無常を感じながら、相模を連れ立ってこの場を去っていく。戦乱の世はまだ続く……。

(鈴木英一)